

中野孝次

古典を読む

4



今昔物語集

岩波書店

古典を読む——4

今昔物語集

---

中野孝次

岩波書店

中野孝次

1925年千葉県に生まれる

作家

『麦熟るる日に』(河出書房新社), 『南チロルの夏』(集英社), 『プリュージェルへの旅』(河出書房新社), 『実朝考』(河出書房新社)など

今昔物語集

---

1983年4月8日 第1刷発行©

定価 1800円

著者 なかのこうじ 中野孝次

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5  
発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111  
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・松岳社

---

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

# 目 次

6	5	4	3	2	1
社会的矛盾のなかに新しい力の蓄えられつつあること	卑俗な現実をつかむには笑いが大きな武器になること	滑稽や嘲笑をもって描くこと き物語に最も生彩あること	退屈な物語も他との関りに おいて光を放ち始めること	後世の読みの深さが死んだ 物語を生きかえらせること	新しい現実は新しい言葉に よって切りひらかれたこと

147	115	85	58	38	8	3
-----	-----	----	----	----	---	---

11	10	9	8	7
矛盾するようだがやはり兵 たちの合戦譚が面白いこと	魂太き者たちが闇に住む神 や鬼どもを追いはらうこと	性にまつわる話も滑稽譚と して語ると嫌味がないこと	盗人の生態から人の世の隠 れた面が焙りだされること	天狗や鬼もまた『今昔』の 世界の重要な住人たること
297	266	243	209	173

今昔物語集





## まえがき

古典といっても、先入観をとり除けば、要するにそれは一冊の書物にすぎないのだから、あれこれ好き嫌いが生じるのはやむをえない。万遍なく尊重しろといっても無理な相談なのである。とくにぼくのように中年過ぎて初めて日本古典を読み始めた者は、それまでに考えや好みがある程度固まっているので、その好悪がはげしい。たとえばぼくは、いわゆる王朝女流文学のたぐいは、なんどとっかかっても読み通すことができない。仮に全部読了しても共感できたためしがあまりない。なぜかと思うけれどもこれは事実だからいたし方ないのである。

『源氏物語』を最初に読みだしたのは、戦時中の十七、八の時分だった。教養として読まねばならぬと思ってとりかかったのだと思う。西尾実校注本(記憶ふたしか)で読み始め、

難行苦行してようやく二章くらい読んだところで、受験勉強の必要とそれにあまりに難しすぎたので中断してしまった。いまでも冒頭の何行かは暗くらんじているのがその唯一の痕跡で、しかしそれ以後何度か全巻通読を志しながら結局いまだに全部読み通したことがないのである。いまではもう読もうとも思わないが。

おそらく王朝女流文学のあの宮廷的・女性的に洗練された美意識と、その閉鎖性とが、ぼくの体質に合わないのだと思う。あの和歌的・抒情的な情感も好みに合わないし、なによりも貴族社会と都市社会だけが唯一の現実であるかのような視界の狭さがやりきれないのだ。これはぼくの育ちの低さにも関係しているのだろうけれども。

そんなわけで、王朝女流文学にはついに無縁、ぼくをひきつけたのはもっとごつごつしたもののばかりだった。『平家物語』を代表とする戦記もの、『狂言』類、鎌倉仏教祖師たちの文章、『吾妻鏡』、『徒然草』、『一言芳談抄』、等々。一言でいって、男っぼい、醒めた、ざらっとした現実の諸相に開放されている文章である。なかでも『今昔物語』は最も愛好してきたものの一つで、いつも傍らに(ということとは手をのばせばとどくところに)置いて折に触れては読んで来た。なにかこっちをひきつけてやまないものがそこにはたくさん詰

っている感じで、ぼくにとって『今昔』を読むのはこよないたのしみの一つだった。

第一にその世界が社会の各層、日本全土にひらけているのがいい。「今は昔、但馬国七美郡川山の郷に……」とか、「今は昔、東の方より……」という、その地域のひろがりだけでなく、想像力をかきたてられる。王朝文学には出てこなかった各層の人間、盗賊や兵や郡司や女や、そればかりか天狗や鬼や幽鬼まで登場する幅のひろさがうれしい。

第二にその文章が、ごつごつしていて、即物的で、簡潔な記録体で、よけいな思い入れや抒情のないのがいい。なまじ固定した美的趣味がないため、醜いもの、汚いもの、悪行、滑稽にまでひろく手ごといて（それらの話になると『今昔』は俄かに精彩を放ちだすようだ）、当時の人間はかくありしかというたしかな感触を与えてくれる。なんといい『今昔』はこの文章の飾らぬ質朴さがいいのだ。

第三に、話そのものの面白さ。もっともこの点は全部が全部というわけにはいなくて、好きな話は限られるけれども、いくつか実によく出来た物語があり、それらはなんと読んでも飽きない。こんなのを小説に作ったらいいだろうなあと気持をそそられる話がいくらもころがっている。

第四に、ここにはなんととってもからっとした笑いのあるのがうれしいところである。

柳田国男が「ヲコの文学」と呼んだ、人間のヲコを笑いとばす目が『今昔』にはある。笑いは、『狂言』から『江戸笑話』まで、日本古典にないわけではないのだけれども、なんといっても和歌的抒情の主流をなす文学系列のなかに、こういう開かれた笑いのあったことがうれしいのだ。

第五に、『今昔』はそのひろく開かれた視界のうちに東国に誕生していた兵つわものという新しい階級をおさめていて、かれらの生態をリアルに描きだし、来るべき時代を予告している。宮廷社会とは異なる人間の勇氣や、思量おもいはかりや、行動原理をとらえているのが、いつ見ても新鮮なのである。

そのほか『今昔』の美点をあげていったらまだいくつか挙げられようが、ともあれそういう点にぼくはひかれて読み耽って来たのだった。ぼくの最も多く読んだのが『今昔』の本朝世俗部であったのは、大方の『今昔』ファンもそうであろうが、そこにやはり一番いいものが詰まっているのだからいたし方あるまい。天竺・震旦の部は、なんとか読みはしたもののどうももう一つピンとこない。筆記者の筆ものびていないような気がする。そこで、

以下『今昔』の何篇かを讀む中でとりあげるのはほとんど本朝世俗の部である。『今昔』の千二百篇のうちからわずかしか取上げられないのは残念だが、ぼくが面白がって讀んだものをとった。少しでも『今昔』の魅力を示せたらと願っている。

1  
新しい現実  
は新しい言葉に  
よって切り  
ひらかれたこと

初めはやはり自分の好きな話の一つをとりあげることしよう。当時まだ社会的に認められず地下<sup>じげ</sup>にひそんだまま、しかし着々と未知の力を蓄えつつあった、兵<sup>つわもの</sup>の生態をくつきりと示す一篇である。

その前にテキストについて一言しておかねばならない。『今昔』は、本来伝わったそのスタイルは、いわゆる宣命<sup>せんみょう</sup>書きである。これは現在入手できる版では「日本古典文学大系」(岩波書店)が採用している。ところがこれがぼくらには実に読みづらい、なじみのない表記法であって、いかに『今昔』ファンのぼくでもお手上げといった感じである。試みにいま取上げようとする話を大系本から引くと次のようなことになっている。

今昔、宇治殿ノ盛サカリニ御オヘシマシケル時、三井寺ノ明尊僧正ハ、御祈トシテ夜居ニ候サブラヒケルヲ、御燈油マキテ參ザリ。暫ク許有バカリアリテ、何事ストハ遣ツカハストハ人不知シラザリケリ、俄ニ此ノ僧正ヲ遣ツカハシテ、夜ノ内ニ返マキルベリ可參マキルベキ事ノ有リケレバ、御既ウマヤニ、物驚キ不為セズ畢セリ不為セズシテ髓タシカナラム御馬ニ移ウツシ置オキテ將參キテサンジテ、召メシテ侍ハベルニ、云々。

大系本の解説によると、「かかる表記法は今日においては既に普通のものではなくなつたが、平安期から鎌倉室町時代を経て江戸時代末期に至る長い間、公武の記録における最も普通の表記法であつて、決して本集独特のものではない。かかる表記法においては、文意の大まかな把握が漢字を拾いよむことによつて可能であり、繊細な理解はカナが助ける、という仕組になつてゐる」といふ。漢字の下の小さなカナがテニヨハに当るそうである。しかし、見てもわかるとおりぼくらにはあまりにとつつきにくい表記法であつて、いたいこまで厳密に昔の表記法によつてテキストを読まねばならないかという疑問が生じるのだ。これは本朝世俗部だからまだしもいいが、天竺・震旦の部となると、まるで見た

こともない漢字までふんだんに使われていて、これでは現代の大方の読者には読めといってもむりだと判断せざるをえないのである。ぼくは好んで中世文献を読む関係から、『明月記』『玉葉』『百鍊抄』『吾妻鏡』などの和製漢文体にはなじんでいるほうだが、そのぼくにしてもこういうスタイルで『今昔』に親しむのはむりだ。従って、以下テキストとするのは、読み易いという点からも、また校注に信頼できる点からも、角川文庫版佐藤謙三校注の『今昔』をとることにする。佐藤さんは、ぼくが二十八年間勤めていた国学院大学の先輩教授であり、その無私の人柄と、中古・中世文学に関する深い学識とに、なみなみならぬ尊敬と親愛の思いをいっていた方なのである。惜しくも数年前に亡くなられたが、角川文庫版は脚注などでもできるだけ少なく、要所要所にゴチックでぶっきら棒に猿神伝説とか何とか注意があるだけのそっけない教科書版だが、それでいて他の版にない入念な索引がついており、読んでいて佐藤さんの人柄が偲ばれるのだ。古典に親しむにはこういう個人的な事情もぬかせない。そのほかぼくが親しんだのは、一篇ごとに編者の率直な主観的な感想が記されているので好ましい「日本古典全書」(朝日新聞社)版と、最近出た「新潮日本古典集成」(新潮社)で、それぞれに捨てがたいのであるが、やはりテキストとしては個



人的な思い出からも角川文庫版を使うことにする。

ところで、『今昔』が、当時すでに完成されていた王朝文学的和文によってでなく、こういう文学臭の全くない実用的な記録文のスタイルで記されたということは、『今昔』の内容とも深く関っているだろうと思う。それは何よりもまず事実を簡潔に正確に伝えることを目的とする文体だから、『今昔』はよけいな情緒的ビラビラは悉皆とり去って、もっぱら事だけを伝える、ある意味では素気もないスタイルになった。この欠点は、話によってはまったくとりつくしまもないような無味乾燥な文章になってしまふという点である。知識(仏典や史書)にたよって書いたとおぼしい天竺・震旦の部にとくにそういう話が多い。一方その長所は、世俗部のいくつかの話のように、筆記者が事柄に深い共感をよせたとき、ぐいぐいと対象に迫ってゆく迫真力と、爽快な叙事性とおのずから生れている点である。『今昔』の最もすぐれた話は、この簡素で無飾の文体と事柄のふしぎさとの結合がうまくいっているときに出来た話だ。宣命書きを書くことに慣れた筆記者たちは、専門の文学者でなくて、役所の事務官僚といったような連中だったと思う。いずれにしろ男性、しかもある程度としをとった男で、従って世間の出来事への興味の持ち方も文学青年的でなく世